【調査報告】

乳幼児のスマホ等の利用に関する調査研究

――利用の実態と保育者が感じる危機感――

木　村　達　志　　森　本　紗貴子

Research on Smartphone Use by Infants

—Status of Use and a Sense of Crisis Felt by Nursery Teachers—

Tatsushi KIMURA and Sakiko MORIMOTO

Ⅰ．緒言

総務省の令和元年情報通信利用動向調査[(1)]によると、保育所を利用する保護者世代のスマートフォン保有率は、2019年で20歳代が93.3％、30歳代が90.6％、40歳代が88.0％、となっている。さらに小学生（６歳から12歳）の保有率も37.2％となっている。また、同省の平成29年版情報通信白書[(2)]では、2011年から急速にスマートフォンが普及していることが明確に示されている。このように世間でスマートフォンが普及するに従い、子どものメディア利用やスマートフォンの利用も低年齢化しつつあると考えられる。

スマートフォンは世の中へ急速に普及しその利用も調査結果があるように小学生にまで及んでいる。また、スマホ育児という言葉が生まれており、乳幼児がスマートフォンを始めとしてゲーム機や YouTube ビデオなどのメディアに触れる機会が増加していることは確実である。

アメリカの小児医学会[(3)]では、１歳以下の乳児のメディア利用は避け、また、２歳から５歳の子どもは１日に１時間以内と限定し高品質のプログラムのみを視聴すること、といった指針を提示している。同じように、日本小児科医会のホームページ[(4)]上には、「スマホに子守りをさせないで」という啓発ポスターなどが作成されており、閲覧者が利用できるようになっている。このように、子どものメディア利用については、まわりの大人が適切な関与を行う必要があるが、乳幼児のメディア利用実態や利用方法や利用することによる影響は十分に明らかとなっていない。特に発育発達が著しい乳幼児に対し、メディア利用の在り方を明らかにすることは健康管理上も重要である。

そこで、本研究では、現役の保育士を対象にして、乳幼児のスマホ等の利用実態と保育士が実感している子どもの生活習慣や発達への影響を明らかにした。本研究では、スマートフォンやタブレット端末、ゲーム機などの情報機器を総称してスマホ等と表記している。

Ⅱ．研究の対象と方法

1．対象

上記の研究目的を達成するため、保育士36名を対象とした。

2．方法

図1に示す内容で、Microsoft社のFormsを利用しアンケートを実施した。アンケートの実施にあたり、対象者へは調査の意義や回答することに対する不利益はない事、集計した結果のみを用い無記名であり個人名が公表されることはない事、研究結果の公表方法などをアンケート用紙中の文書で説明し、研究参加への同意を得た。アンケート回収率は100.0％（36/36例）であり、回収できた回答は全てが有効回答であった。本研究は桜花学園大学人を対象とする研

Q1.	現在のご担当のクラスは何歳ですか
Q2.	これまでの保育歴（正規・非正規を合算）について教えて下さい
Q3.	現在の雇用形態について教えてください
Q4.	先生はクラス担任ですか
Q5.	先生は何歳代ですか
Q6.	担当している子どもが家庭などでスマホ等に触れていると感じることがありますか。操作は保護者がしている場合も含みます
Q7.	子どもが家庭などでスマホ等に触れていると感じることがある場合、具体的な内容について当てはまるものすべてを挙げてください
Q8.	子どもが家庭でスマホ等に触れていることにより、保育現場で違和感や危機感を抱くことはありますか
Q9.	先生方が抱かれる違和感や危機感の具体的な内容について、当てはまるものすべてを挙げて下さい
Q10.	違和感や危機感について、どれくらい同僚保育者と話をしたり意見交換をしたりしますか
Q11.	子どもがスマホ等に触れているかいないかは、保護者のいわゆるスマホ育児の弊害に関する知識の有無によると思いますか
Q12.	乳幼児のスマホ等利用について、保育園から保護者への情報発信や啓発などが必要であると思いますか
Q13.	子どもが自分でスマホ等の操作が出来るようになるのは、どのくらいからだと思いますか
Q14.	先生は、子どものメディア利用時間を制限するといった親による子どものメディア利用への介入や取り組みであるParental Mediationという言葉をご存じですか
Q15.	先生が保護者と関わる中で、保護者の子育てに関する困り感と子どもがスマホ等に触れることについて関係があると思いますか
Q16.	子どもがスマホ等に触れる機会が低年齢化していると思いますか
Q17.	子どもがスマホ等に触れることについて、保護者から相談を受けたことがありますか
Q18.	登園や降園の際に、子どもが保護者のスマホ等に触れているシーンや子どもがスマホ等の利用をせがむようなシーンに遭遇することはありますか
Q19.	子どもがスマホ等に触れていることについて、先生が思われていることをすべて挙げて下さい

図1　アンケート項目

究倫理審査委員会の承認を得て実施した（2021年10月19日承認、受付番号大2021-08）。

Ⅲ．結果

1．基本統計量

回答者のプロフィールであるQ1からQ5の集計結果は次の通りであった。Q1は、２歳が12名（34.3％）、５歳が６名（17.1％）、３歳とフリーがそれぞれ４名（11.4％）であり、０歳と１歳の混合、１～５歳、１歳、１歳と２歳の混合、３、４歳混合クラス、４歳、肢体不自由児３、４、５歳児、全クラスに入る、託児で０歳から10歳くらいまで、その他が各１名（2.9％）であった。Q2は、５年以上が24名（66.7％）、１年未満が６名（16.7％）、１年～３年が５名（13.9％）、３年～５年が１名（2.8％）であった。Q3は、正規採用フルタイムが24名（66.7％）、非正規採用、６時間勤務が５名（13.9％）、正規採用時短勤務が４名（11.1％）、非正規採用、４時間勤務が２名（5.6％）非正規採用で、お客様やスタッフの予約の有無により勤務時間が変わるが１名（2.8％）であった。Q4は、担任が25名（69.4％）、担任ではないが11名（30.6％）であった。Q5は、30歳代が23名（63.9％）、20歳代が13名（36.1％）であった。

次に乳幼児のスマホ等の利用実態についてであるが、Q6の担当している子どもが家庭などでスマホ等に触れていると感じるかでは、「とてもある」が66.1％、「ややある」が33.3％であり、この２項目で99.4％であった。Q7の集計結果を図２へ示した。「子どもがスマホ等に触れているかは家庭により異なる」が31.3％であり、「ほぼどの家庭でも子どもがスマホ等に触れていると感じる」、「子どもは人知れず操作を覚えてしまう」、「母親の育児ストレス軽減のためある程度は仕方ない」がほぼ同数であった。Q8の集計結果を図３へ示した。「ややある」が58.3％、「とてもある」が5.6％であり、63.9％が担当している子どもが家庭などでスマホ等に触れていると感じていた。Q9の保育者が抱いている違和感や危機感の具体的内容については図４へ示した。「保護者が子どもとかかわらずスマホ等を見せている」が31.7％であり他の項目から飛びぬけていた。その他が12.7％であるが、その内容は「性格が受け身になる」、「激しい言葉を真似して使っていることがある」、「YouTubeなどはどんどんと自動再生をするため、区切りがつきにくく、映像や音も印象強いものが多くて、見ていない時も頭で自動再生されて

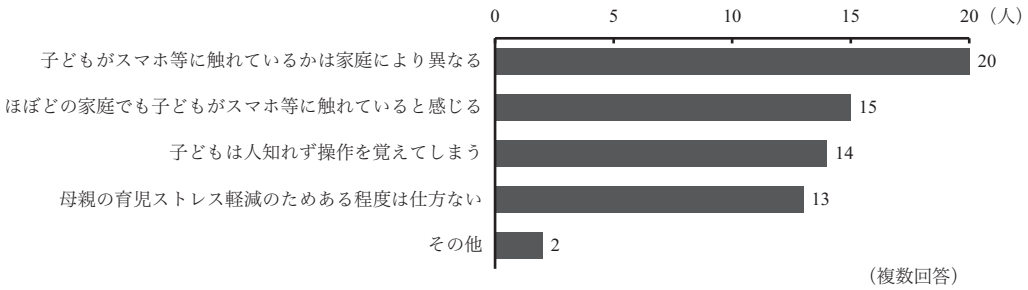

図２　子どもがスマホに触れていると保育者が感じる場合の具体的な内容

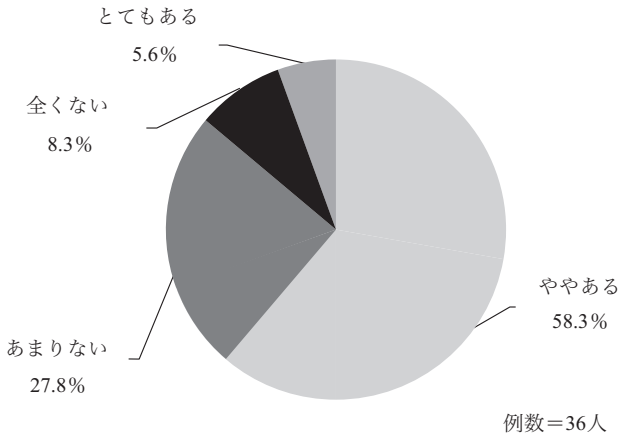

図３　子どもがスマホ等に触れることによる
危機感の有無

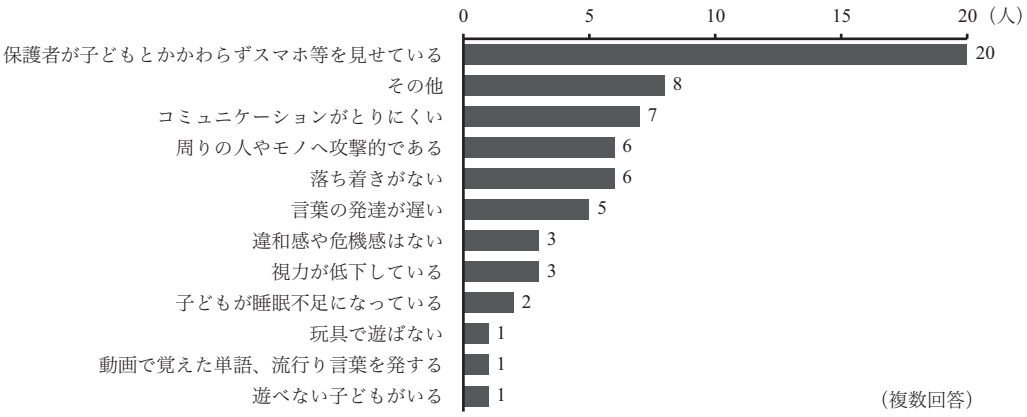

図４　保育者が感じる違和感や危機感の具体的な内容

いて日常の生活の妨げとなる」、「SNS などで使われる言葉を、意味を理解せずに楽しげに使ったり言ったりする姿がある」、「言葉が現実的でない。ゲーム用語を多用している子もいる」、「不適切な言葉を使っている、血が出るような大人向けの番組を見ている」、「一人でも他者とでも上手く遊べず他者を傷つけるやり方で排除したり、反対に物凄く保育士に甘えてきたりと情緒が不安定になりやすい」、「何か分からないことがあるとスマホで調べることが当たり前になっている」であった。Q10は、「時々する」が52.8%、「あまりしない」が36.1%、「全くしない」が11.1%であった。Q11は、「やや思う」が61.1%、「あまり思わない」が33.3%、「とても思う」が5.6%であった。Q12の集計結果を図５へ示した。保育園からの情報発信の必要性について「やや思う」が61.1%、「とても思う」が19.4%であり両者で80.5%であった。Q13の集計結果を図６へ示した。子どもが自分でスマホ等の操作が出来ようになるのは「１歳～１歳６か月」が27.8%、「１歳６か月～２歳」が22.2%、「９か月～１歳」が5.6%であり２歳までが56.6%であっ

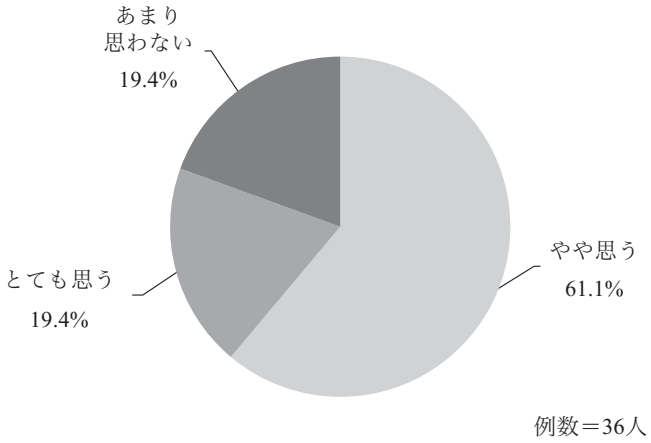

図５　乳幼児のスマホ等利用について保護者への啓発は必要か

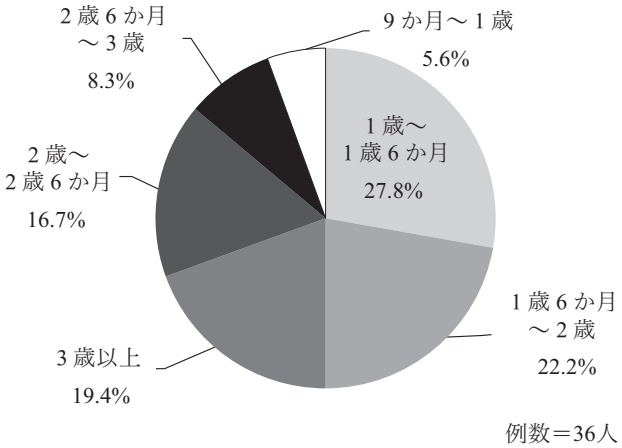

図６　子どもが自分でスマホ等の操作が出来るようになる年齢

た。Q14は、「初めて知った」が91.4％、「知っている」が8.6％であった。Q15は、「やや思う」が61.1％、「あまり思わない」が27.8％、「とても思う」が8.3％、「全く思わない」が2.8％であり、保護者の子育てに関する困り感と子どものスマホ等の利用が関係していると思われるのは69.4％にのぼった。Q16の集計結果を図７へ示した。子どもがスマホ等に触れる機会の低年齢化は、「とても思う」が91.7％であり、「やや思う」が8.3％であり両者で100％であった。Q17の集計結果を図８へ示した。スマホ等利用に関する保護者からの相談は「あまりない」が41.7％、「全くない」が30.6％、「時々ある」が27.8％であった。Q18は、「時々ある」が38.9％「全くない」が33.3％「あまりない」が22.2％「よくある」が5.6％であった。Q19の集計結果を図９へ示した。子どもがスマホ等に触れることについて保育士が思うことは、「制限ばかりではなく、上手な利用の仕方を保護者へ勧める」が38.6％、「乳幼児期は極力触れさせないようにしたい」が25.7％、「子ども月齢や年齢によって一定の制限をかける必要がある」が18.6％、「出

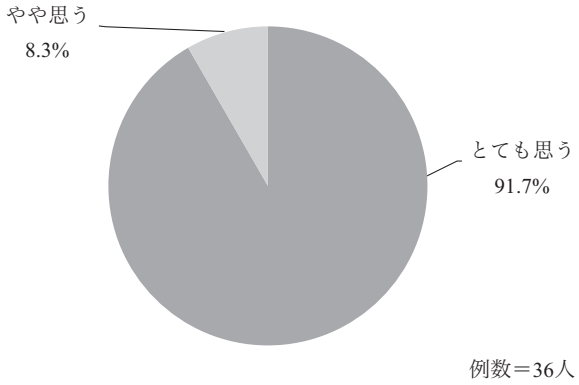

図７　子どもがスマホ等に触れる機会は低年齢化しているか

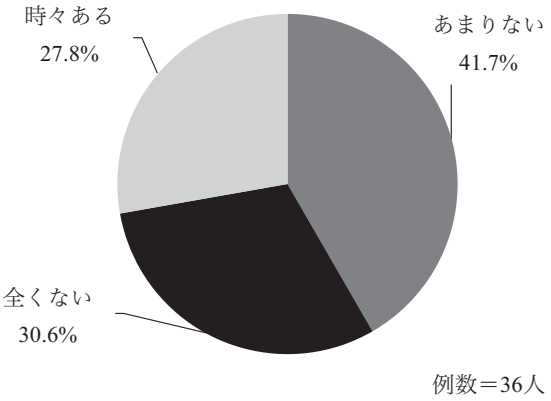

図８　子どものスマホ利用に関する保護者からの相談

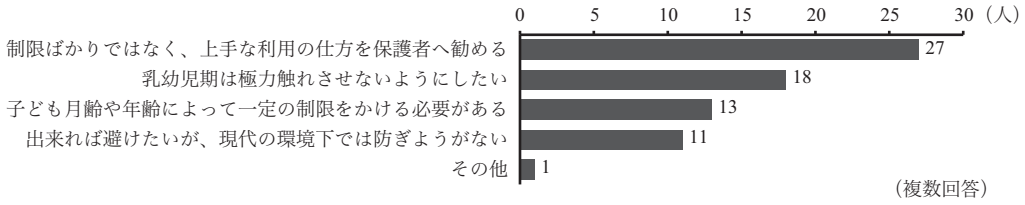

図９　子どもがスマホに触れることについて思うこと

来れば避けたいが、現代の環境下では防ぎようがない」が15.7%、「その他」が1.4%であった。

２．クロス集計

対象者プロフィールに関する項目とQ8の子どもが家庭でスマホ等に触れていることにより保育現場で違和感や危機感との間でクロス集計および有意差検定（カイ二乗検定）を行い、その結果を表１から表４へ示した。母集団が36例であり、なおかつ分布に偏りがあり検定に必

表 1　Q1 と Q8 との関係

		担当クラスの年齢		
		3 歳以上	3 歳未満	合　計
子どもが家庭でスマホ等に触れていることにより、保育現場で違和感や危機感を抱くことはあるか	とてもある	1	1	2
	ややある	13	8	21
	あまりない	4	6	10
	全くない	1	2	3
	合　計	19	17	36

単位：人、Pearson カイ二乗値＝1.818,　自由度＝3,　P 値＝0.611
Yates の補正 カイ二乗値＝0.6366,　自由度＝3,　P 値＝0.888

表 2　Q2 と Q8 との関係

		これまでの通算保育歴		
		3 年以上	3 年未満	合　計
子どもが家庭でスマホ等に触れていることにより、保育現場で違和感や危機感を抱くことはあるか	とてもある	1	1	2
	ややある	18	3	21
	あまりない	5	5	10
	全くない	1	2	3
	合　計	25	11	36

単位：人、Pearson カイ二乗値＝6.602,　自由度＝3,　P 値＝0.086
Yates の補正 カイ二乗値＝3.427,　自由度＝3,　P 値＝0.330

表 3　Q4 と Q8 との関係

		担任をしているか		
		はい	いいえ	合　計
子どもが家庭でスマホ等に触れていることにより、保育現場で違和感や危機感を抱くことはあるか	とてもある	1	1	2
	ややある	14	7	21
	あまりない	8	2	10
	全くない	2	1	3
	合　計	25	11	36

単位：人、Pearson カイ二乗値＝0.969,　自由度＝3,　P 値＝0.809
Yates の補正 カイ二乗値＝1.470,　自由度＝3,　P 値＝0.986

表 4　Q5 と Q8 との関係

		担任の年齢		
		20代	30代	合　計
子どもが家庭でスマホ等に触れていることにより、保育現場で違和感や危機感を抱くことはあるか	とてもある	1	1	2
	ややある	5	16	21
	あまりない	5	5	10
	全くない	2	1	3
	合　計	13	23	36

単位：人、Pearson カイ二乗値＝3.595,　自由度＝3,　P 値＝0.309
Yates の補正 カイ二乗値＝1.489,　自由度＝3,　P 値＝0.685

要なサンプルサイズ（5例以上）を得ることができなかったセルがあったため Yates の補正も行ったが、対象者プロフィールと Q8 との項目間で有意な関係は認められなかった。

Ⅳ．考察

本研究では、保育士を対象にアンケートを実施し、乳幼児に関してスマートフォンやタブレット端末などの情報機器の利用実態やそれに伴う子どもの生活習慣や発達への影響との関連を明らかにした。保育士を対象とした理由は、家庭で子どもがスマホ等に触れていることで起きている時間の大半を過ごす保育園で、良い面でも悪い面でも何等かの影響が出ているのではないかと考えたからである。また、スマホ育児という言葉が保護者にとって自責の念をいだかせ、正確な利用実態が把握できない恐れがある。さらに、橋本らの先行研究[5]で母親を対象とした情報機器の利用状況が明らかになっている点も考慮した。

まず利用実態であるが、Q6では99.4％の保育者は子どもが家庭などでスマホ等に触れていると感じており、さらに Q19では15.7％ができれば（乳幼児のスマホ等の利用は）避けたいが現代の環境下では防ぎようがないとしている。これは、岡本らの先行研究[6]でも述べられており、スマホ等が乳幼児の生活に深く浸透していることを本研究でも確認された。また、その利用年齢も Q13の結果が示すように2歳までが56.6％であり、Q16の利用の低年齢化は保育者全員がそのように感じており、急速な普及に伴い利用年齢の低下とそれを避けることが難しく、どのようにしてスマホ等を利用していくかが今後の大きな課題と思われた。

次に、乳幼児のスマホ等利用については、緒言でも述べたように国内外でいくつかの提言がなされている。このような提言を保護者会などでの資料として活用することで保護者へ問題意識を持ってもらい、保育現場と保護者が連携し、よりよい子どもの発達や成長を目指すことが可能になる。また、保育現場の多忙感は強いものがあるので多くは求められないが、子どものメディア利用時間を制限するといった親による子どものメディア利用への介入や取り組みである Parental Mediation という言葉を知っている保育者は8.6％であったので、乳幼児のスマホ等の利用について保育者向けの研修を充実させる必要があるのではないかと感じた。Q12では保育園からの情報発信の必要性を80.5％の保育者が感じているので、後はこれをどのような内容で実行していくかが課題である。さらに、Q19では乳幼児のスマホ等の利用について、保育者は制限ばかりではなく上手な利用の仕方を保護者へ勧めるという回答が最多であり、保育現場と保護者との連携は欠かせないものであると思われた。乳幼児のスマホ等の利用について、保育者が感じる危機感や違和感が Q9の結果に示されているが、筆者らは心身の発達や生活習慣に影響があると予想した。しかし、実際は、保護者が子どもとかかわらずスマホ等を見せていることに問題意識を持っている保育者が圧倒的であった。野口ら[7]は、母親のインターネット依存傾向に育児ストレスが関連していることを示唆しており、本研究の結果からも子育ての困難感が乳幼児のスマホ等の利用を促進しているのではないかと考えられた。保護者の子育てに対する困難感の軽減を図り、保護者が子どもと関わる時間を拡大させるためには、どのような

取り組みが必要であるかの検討は今後の課題としたい。

最後に、保育者のプロフィールと子どもが家庭でスマホ等に触れていることによる保育現場で違和感や危機感との関係であるが、本研究では有意な関係は認められなかった。これは、保育者の保育歴や担当クラス、担任であることなどにかかわらず保育現場で子どもと関わっている保育者は等しく違和感や危機感を抱いているからではないかと考えた。

参考文献

⑴ 総務省、令和元年情報通信利用動向調査、１．インターネット等の普及状況、(7) モバイル端末の保有状況（個人）、図表1-13 年齢階級別モバイル端末の保有状況（令和元年）https://www.soumu.go.jp/main_content/000689455.pdf、2022.1.6取得

⑵ 総務省、平成29年版情報通信白書、第１節スマートフォン社会の到来、１．数字で見るスマートフォン利用状況、数字で見たスマホの爆発的普及（５年間の量的拡大）、図表1-1-1-2 スマートフォン個人保有率の推移 https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/n1100000.pdf、2022.1.6取得

⑶ American Academy of Pediatrics [AAP] (2016). Media and young minds. Pediatrics, 138(5), e20162591 https://doi.org/10.1542/peds.2016-2591、2022.1.6取得

⑷ 公益社団法人 日本小児科医会、一般の皆様へ、子どもとスマホ https://www.jpa-web.org/information/sumaho.html、2022.1.6取得

⑸ 橋元 良明、久保隅 綾、大野 志郎、育児とスマートフォン、東京大学大学院情報学環情報学研究．調査研究編 (36)、197–241、2020

⑹ 岡本 千晴、岡田 みゆき、スマートフォンを用いた育児の実態、北海道教育大学紀要．教育科学編70(1)、275–282、2019

⑺ 野口 三奈生、山口 一、母親と子どものモバイル端末使用と母親のインターネット依存傾向―子育てストレスとアタッチメントとの関連―、桜美林大学心理学研究 (10)、32–43、2020

（受理日　2022年１月６日）